

# 深秋随想

劇団を青森市で旗揚げしたのは〇五年秋である。劇団名の「渡辺」は婿養子であった亡父の旧姓、「源四郎」は亡祖父の名前である。演劇に関わって二十年余、初めて持つ自分の城には父祖の名を借りるべきだと思った。そして、「俺はアーティストだから馬鹿はワカンなくていい」と居直る態度から距離をとりたかった。いらっしやいませ。

まいどあり。お客様に芝居をお出しする商店でありたい。「渡辺源四郎商店（略称…なべげん）」なる劇団名はこのようにして決まったのである。立ち上げ時から東京に制作スタッフを置いた。基本的に全ての公演を東京でも行うためである。表現者は全国に散らばっているが批評家は極端に東京に集中している。全国的に評価を得て全国にそして世界に活動の場を広げるためにはまず東京で評価される必要があるのである。

とはいえ問題は地元青森での拠点作り。青森で芝居を作るメリットを生かすため、専用の稽古場、できれば公演も打てるアトリエを持ちたいと

考えた。開店準備公演の準備に明け暮れていた〇五年秋、青森市本町の空きビルと出会い、〇六年五月、セゾン文化財団の助成の支援を受けた劇場拠点創造プロジェクトを始動させた。十月のこけら落とし公演の舞台美術を空間に合わせ、稽古から上演まで一挙に行う。それを一般公募の市民による

## 地方で演劇をするところから

### 劇団「渡辺源四郎商店」のこれまでとこれから

**畑 澤 聖 悟**  
(昭和58年卒)  
劇作家・演出家



ワークショップでやってしまおう試みである。自分たちで作り上げた空間で芝居を練り上げ、公演を打つ。実に得難い経験を多くの人々と共有することが出来た。モノツクリにとって本当の豊かさとはこれだ！と、胸を張って主張する。しかし渾身の力作であるわが城はオトナの事情によりこけら落とし公演から実働一年で立ち退きを余儀なくされて

しまう。再び空き店舗や空き倉庫物色の日々が始まり、陸奥湾に面した二階建ての廃レ스토랑に巡り会った。せつせと張った壁や床をひっぺがし、山のような荷物や機材とともに引越し。二つめのアトリエを作り上げた。オーナーの経営する青森グリーンパークホテルとのネーミングライツ契約に基づき「アトリ

エ・グリーンパーク」と名付けた。日本初の小劇場ネーミングライツである。〇八年から始めた中学生演劇体験ワークショップは毎年夏に行われ、もう四年目になる。演劇未経験の中学生を集め、七日間で基礎稽古から本番までを経験させるプログラム。なべげんとアトリエがあることを地域住民の皆さんに誇りに思っ貰いたい。その

ためには演劇の喜びを体験して貰うことで貢献しようと考えたのである。今後は「高齢者ワークショップ」「主婦ワークショップ」と間口を広げていき、ゆくゆくは演劇による世代間交流ができないか。これは地域の演劇文化を振興するだけでなく、青森で演劇活動するわれわれにとって切実な「顧客作り」の作業でもある。観劇と宿泊をセットにしたアイディアも生まれている。

JALとホテルと提携し、首都圏のお客さんを青森に呼ぶ企画。あえて青森のみで公演した「修学旅行」では、東京、埼玉、神奈川、栃木など県外からの利用者に数多く足を運んでいただいた。芝居を観るのは東京で、という固定観念を少しずつ打破していきたい。我々と同じように地方で自分のアトリエを作って頑張っている地方のカンパニーと東京を経由せずに地方と地方を結んだネットワークを構築する作業も進めていきたい。すでに帯広の「茶館工房」との交流がスタートしている。何はともあれ大事なものは続けていくことだ。地域に貢献し、地域に愛され、いい観客を作り、そしていい芝居を作り続けていく。これが地方で演劇活動を続ける者の使命である。

**大淵歯科醫院**

大 淵 義 孝  
(昭和42年卒)

秋 田 市 中 通 4-7-35  
秋 田 市 民 市 場 2 F (北西角)

**秋山牧税理士事務所**

所長 秋 山 牧  
(昭和42年卒)

秋 田 市 東 通 仲 町 15-5  
T E L 0 1 8 - 8 3 7 - 2 2 8 1

ボールペンから事務機まで

代表取締役 金子真悟  
(昭和42年卒)

本 社 / 秋 田 市 山 王 五 丁 目 12-21  
T E L 8 6 2 - 5 3 7 1 (代)

大 町 店 / 秋 田 市 大 町 三 丁 目 4-45  
T E L 8 6 3 - 9 0 0 9

ある。東京でなく地方を活動の場に選んだ以上、単に芝居をやるだけでは足りないと考ええる。

我が劇団はここ数年、おかげさまで郷里秋田でも毎年公演させていただいている。今後とも渡辺源四郎商店をどうぞ御鼻屑にお願いいたします。